

より良い親子関係講座

NO 68

子どもを護りながら、手放すことの難しさ

今さらと思われるかもしれませんが、子育ての目的は「子どもを護りながら、子どもが自立できるように育てること」です。自立とは、親の保護から離れ、その子らしく、のびのびと生きていくことができるように育てることです。この「護ること」と「自立させること」は、時には相反します。親は護ることと自立させることの狭間で迷いますし、悩みもします。護るために親はわが子に危険なものに近づけたくない、近づいてほしくないと思うでしょう。同じように、失敗もまちがいをできるだけ避けたいと思うでしょう。親の、子どもを護らなければならないというこのような気持ちがある間にか過保護や過干渉に発展する場合もあるのです。

一人っ子を育てている几帳面で過干渉ぎみのお母さんが受講されました。初めに彼女は「私には子育ての失敗など許されないのです。親が敷いた間違いのない道を歩いてほしい。後がないんですから私には・・・」といわれました。だから、彼女は毎日まるで「カーリング」のように、子どもの行く先を箒で掃いて、子どもが危険な目にあわないように、そして親の思うところに導こうとしているのです。

私は一人っ子であっても、子どもが自分で判断し、より良い選択ができる力を育てるためには、少々痛い思いをしてでも結果から学ぶ経験が大切だと思っています。もちろん命の危険性が考えられる場合は親の責任としてきっぱり「いけません。ダメです!」と言わなければなりません、少々痛みはいい経験になります。失敗は可愛そうなことではないのです。彼女には、子どものやることを管理干渉しないで黙って見守っていてほしいです。もしも失敗したときには「うまくいかなかったね。残念だったね」と気持ちにより添ってほしいのです。失敗やまちがいを恐れなくてほしいのです。もっと子どもを信頼してほしいのです。子育ての中でもっとも大事なことの一つは「失敗した結果からどう学ばせるか」ということなのですから・・・。

APを学び始めた彼女のかたくなな気持ちは、講座が進んでいくうちにいい感じに少しずつ柔らかくなっていきました。そして、ある日、「子どもに任せてみるようになったらずいぶんと楽になりました!」と、嬉しそうに話されました。

家庭は、子どもが生きるために備えられる場所です。ですから間違いや失敗の練習の場だと考えましょう。どのような失敗も親の温かいサポートさえあれば、子どもはかならず立ち直ることができます。子どもは親が思っている以上に賢く、しなやかで強いのです。

日頃の言動で「これでいいのかな〜」「このままのやり方でいいのかな?」などと気になったり、迷ったりしたときは、「私が子どもに言ったことやしたことは、子どもの自立に役立っているのだろうか?」と考えてみると、答えを出しやすいのではないのでしょうか。そう思って出した答えに間違いはありません。いずれ、子どもは親の元から巣立っていきます。日々の子どもの暮らしが、子どもと過ごす時間が、どうぞ楽しくて、充実した時間になりますように!



“Too Much Empathy??”

In another year Barrack Obama will have completed eight years in office and the country will be voting in a new President. Already candidates are busy telling folks they should vote for them. I have heard several TV commentators calling this “the silly season.”

This week we watched the 2nd debate among the Republicans. On hearing their remarks, I agree it must be “the silly season.” One of their candidates (who is #1 in the polls!) is a guy who seems to have no empathy at all for others. In the large group of Republicans there is one woman who wants to be President. Mr. Trump remarked: “With a face like hers, who would vote for her?” He said the illegal Mexicans were bringing “drugs, crime and rapists” to the U.S.

While I have always believed that empathy is a very important trait to instill in our children, I just learned that it is possible to have too much!

Neuroscientists consider the condition as a state of “heightened empathic ability.” The term for this is “Mirror-touch synesthesia.” For example, If persons with this condition sees someone slapped across the cheek, they would feel the sensation on their own cheek.

I read about Dr. Joel Salinas who has this condition. It is both a blessing and a curse in his profession: on one hand he can empathize with his patients, but for him to go through a day feeling the prick of every shot he gives, or not to be overcome emotionally when he has to care for car-crash injured patients is often difficult for him. He has had to learn to calm himself and to detach somewhat from the situation.

In our relationships with children, of course we want to encourage them to imagine how other children might feel if they are mean to them and we hope they will develop empathy. But if we are dealing with a super-sensitive child who seems to have mirror-touch synesthesia, we need to accept that as a real thing and help h/h learn to deal with it. (Dr. Salinas takes deep breaths and puts his focus on the calmest person in the room.)

I never thought it possible to have too much empathy, but in learning about mirror-touch synesthesia, I realize that the real key here as in almost every other area is in getting the Balance.

June Seat (APJapan Founder and Friend)



共感し過ぎ??

あと1年したらバラック・オバマ氏は8年の大統領任期を終えるので、アメリカは新しい大統領選をしています。すでに候補者たちは自分に投票するようにと懸命に呼びかけています。私は何人かのテレビコメンテーターたちがこのことを「バカげた季節」と呼んでいるのを聞きました。

今週私たちは共和党内の2回目の論戦を見ました。彼らの意見を聞いて、それが「バカげた季節」という意見に賛同せざるを得ません。候補者の中の一人（投票結果で1位になった人！）には他者への共感などみじんもないように思えました。共和党の大勢の候補者たちの中で、大統領になりたいと思っている一人の女性がいます。トランプ氏は「あんな顔をして、誰が彼女に投票すると言うのだ？」と言いました。彼はメキシコの違法移民はアメリカに「麻薬と犯罪と強姦犯」を連れてきている、と言いました。

さて、私はいつも、共感力は長い年月をかけて子どもたちの心に浸透させる大事な習性であると信じてきたのですが、それが余分にあり過ぎるということもあるのだということを知ったばかりです。

神経科学者たちはこの状態を「共感能力が高くなった状態」と考えています。専門用語では「ミラータッチ共感覚」と表現されています。例えばこの感覚を持っている人が、誰かが頬を平手打ちされるのを見ると、自分の頬に痛みを感じるのです。

私はこの感覚の持ち主であるジョエル・サリナス医師のことを読みました。それは彼の職業に於いては恵みでもあれば災いでもあるのです。彼は患者に共感することができる一方、患者に注射をするたびにチクリとする感覚を覚えながら一日を過ごさなければならないこと、あるいは自動車事故でけがを負った患者のケアにあたる時は感情に流されないようにするのが難しいことが度々あるのです。彼はこれまでに、自分自身を落ち着かせたり、そのような状況からいくぶん距離を置くことができるようになってきています。

子どもたちとの関係において、子どもに、他の人をいじめたらその人たちはどんな気持ちだろうかと想像できるように促したいですし、子どもたちに共感能力を発達させてほしいと思っています。しかし私たちが、ミラータッチ共感覚のような超感覚的な子どもを相手にする時は、私たちは、それを事実のこととして受け入れ、そのような子どもたちが、自分が非常に敏感であることに対応できるように助ける必要があります。（サリナス医師は深呼吸をし、部屋の中で一番冷静な人に注目します。）

私は、共感し過ぎることがあるなどとは考えたことがありませんでした。しかしミラータッチ共感覚を知ったことで、他のほとんどどのような領域に置いても同様ですが、ここで重要な鍵はバランスを取ることであると思いました。

APジャパン創設者、友人 ジューン・シート

訳：野口 紀子

「APリーダー養成講座を終えて」

白石 美代

終了レポートを書きながらAPのテキストをパラパラめくり、読み込んでいくうちに、ようやくAPの入り口に立てたような気がしました。中学1年生の息子の不登校がきっかけでいろんな講演会や勉強会に足を運ぶ中で、縁あって出会えたのが「AP」でした。

私自身教育関係の仕事に携わった経験があり、また学生時代心理学専攻をしていたものの、APのテキストをはじめて読んだときは驚きでいっぱいでした。自分の子育てにおいては「どこに出しても恥ずかしくない子」に育てあげることに一生懸命だったような気がします。APの基礎概念である「親と子どもの平等」や「勇気づけ」は私にとって親としてのあり方や、人としてのあり方を具体的に示してくれる考え方でした。

基礎講座受講中はAPは理想的な考え方だけれど、それができない自分と向き合えなくて悩むこともありました。また、自分の育てられ方について振り返り、親への感謝、または不満、その両方の感情を受け止めることができました。良かったと思います。そして、リーダー養成講座。学んでいくうちに内容がどんどん深まり、面白くなっていきました。誰かに伝えたい、という思いも出てきました。そのうちに息子も元気を取り戻し、家族の中にも会話や笑顔が増えてきたような気がします。

忙しい毎日に追われ、自分のことだけで精一杯になっていた日常。気づくと周りが少しギクシャクしていたのかもしれませんが。APを学ぶことでいつからでもやり直せる！と思っています。うまくいなくても、いっしょに学ぶ仲間がいる限り、何度でもやり直せる！と感じています。皆さん、本当にありがとうございました。一緒に学び続けて行きましょう！



読書の秋です！読んでますか、ホン？
おすすめの本、ご紹介しま〜す！



☆「みまもることば」石川憲彦 ジャパンマシニスト社

石川氏は小児科医から精神科医に転身。あとがきには次のような言葉が載せてありました。「見守るのに力あることばにはかならず次の要素が含まれるとわかってきます。一つ、自然治癒力への謙虚な信頼、二つめは時間の流れに希望をもって耐えること。三つめは見守る相手を尊敬すること。」

☆ 西野流「ゆる親」のすすめ(上) 「7歳までのお守りBOOK」

西野流「ゆる親」のすすめ(下) 「10歳からの見守りBOOK」

西野博之 ジャパンマシニスト社

ていねいにその子の思いを聴いてみる。このとき親の望むほうへ誘導しようなんて焦っちゃいけない。幼くて、世間知らずと思っても「もったいない」と思っても、まずは子の思いを受け止める。そして「あなたの人生だから自分で決めていいのよ」って。大人の親身なアドバイスは「聴くことから始まり、それがあってこそ、子どもも自分の考えが整理されていくものです(II章「自分で決めること」を支えるより)

☆「レディ・レッスン」 “そろそろちゃんになりたい”と思ったら

ケリー・ウィリアム・ブラウン著 鹿田 昌美 大和書房



「びっくりぼんや!？」 勇気づけと勇気くじき

最近私がかまっているのが、NHKでこの秋から始まった朝ドラ「あさが来た」です。物語は、江戸時代後期から大正までの大阪を舞台に、様々な困難を乗り越えて成長するあさと、その家族を通して、社会に貢献するさまを描いています。

このドラマのどこがおもしろいのか、というと、APでいう「勇気づけ」と「勇気くじき」が物語の中に対照的に見てとれて、登場人物に共感できるからです。主人公「あさ」と姉の「はつ」の嫁ぎ先での家族の関わり方は、まさにそう。子を想う親の気持ちは同じであっても、考え（信念・価値観）が違うことで、親の態度やかける言葉がまるで違ってしまい、結果、人の生き方にこうまで影響を与えてしまうのか、と考えさせられます。

主人公あさのモデルは、激動の時代を女性実業家として、炭鉱事業、銀行、生命保険事業、女子大設立など、あらゆる事業を手広く展開した広岡浅子。小さい頃からおてんばで、相撲好き。「なんで女の子は、本を読んだり、そろばんをはじいたりしてはいけないの？」と食ってかかる。母からは「あんたはあかん子やけど、筋金入りのあかん子や。その根性は誰にも負けん」と太鼓判を押され、父からは「お前たちの仕事はお家を守ることだ」と言い聞かされて嫁ぐ。

嫁ぎ先で自分を認めてもらい、水を得た魚のように「イキイキと仕事をするあさ」と自分認めてもらえず、笑顔を失いつつも「自分のできることを探そうとするはつ」。まだ物語は始まったばかりですが、時代の波に翻弄されながらも強く生き抜いていく二人の姿が、それぞれに力強く、美しいと感じます。それは、気性や性格がまるで違う姉妹が、それぞれに自分らしく一所懸命に生きているからではないでしょうか。

また、想定外の出来事に「びっくりぼんや!？」と目を丸くしながらも、現状をまっすぐに受け止め、自分の信じる道に向かって進んでいくあさの姿や、厳しく、辛い状況にもユーモアをもって笑顔を呼びおこす大阪商人の心粋が、時代を超えて私たちに勇気をくれます。

タイトルの「あさが来た」は、「あさ(朝)が来ると新しい世界が始まる、そんな社会を明るくするようなドラマにしたい」という思いが込められているそう。

APの子育ての目的は、「社会の中で自分の能力を活かし、いきいきとして生活できるように、子どもを護りながら自立への準備をすること」といえます。私の子ども、3人姉妹の長女はもうすぐ結婚、そして次女は就職で家を出る予定です。三女は受験生。それぞれが人生の岐路に立っています。

これから世界を相手に、混とんとした社会の中で生きていこう子どもたちを、どのように勇気づけ送り出せばいいのだろうと、日々悩みます。親から見ると、「そんなこと無理だろう」と思えることも、本人たちは「これがいい」「こうしたい」と言い張ります。そんな子どもたちの「今」を認め、未来を支えるために笑顔で送りだせる親になりたいと思う今日この頃です。

福岡市トレーナー 吉田有子



宇都宮市 トレーナー 澤田 直子

私は、栃木県宇都宮市でAPリーダーをしています。2004年からAP講座を開き、12回目を迎えた今年で受講者が述べ100人を超えました。

今年8月、思い立って研修を受け、トレーナー資格をいただくことができました。リーダーとしての活動で手いっぱいだという気持ちも大きかったのですが、APリーダーを目指したい方が遠くに行かなくて良いように、と思つての決断でした。

決断とは大げさですが、飛行機に乗って福岡へ行く(26年ぶりの飛行機!)福岡には地下鉄がある(都会だ!)と、私にとってはなかなかの大仕事。でも地下鉄の駅を降りたら、野中さんが満面の笑みで出迎えてくださり、そこから2日間のトレーナー研修は本当に楽しく有意義で、心の底から行って良かったと思えました。

私の本業は牧師ですので、日常、「教えること」を仕事にしています。これは親という立場にも共通することですが、「教える」立場をずっと続けていると、常にある種の勘違いをする危険があります。「教わる」者に対する尊敬の欠如、自分を正しいと思ひ込む傲慢、相手の言い分を聞かず自分からの発信のみで物事を進めてしまう、などなど・・・。

今回のトレーナー研修では、いかに複数の受講者の心に寄り添って、受講者の言葉を引き出していくか、まず共感することの大切さなど、(これはまさにAP5章です!)改めて気づかされ、自分の感受性も豊かでないといけないなあ、と痛感しました。

私の場合、受講者は教会と同じ敷地にある認定こども園の保護者の方がほとんどです。皆さん本当に真面目に、一生懸命に子どもを育てています。しかしそこが意外な落とし穴で、現代の多くの母親は、「がんばればできるはず」という幻想に囚われているのです。

もともと、子どもを育てる、というのは原始的な本能的な、ごちゃごちゃして予想のつかないもの、先が見えにくいものであるはずですが。「人間にはどう努力しても届かないことがあって、そういう悔しさ悲しさを覚えるのも生きるということ」と、頭ではわかっているのですが、実際

には「すぐできる」「いつもできる」「失敗はしない」を求めてしまうのでしょうか。

子どもには、失敗をしない生き方を教えるのではなく、失敗から何を学ぶかを教えて欲しいなあ、と思うのですが、お母さん自身が失敗をととても恐れているようにも見えます。

「P→Rと書いて、冷蔵庫に貼っておいて。」心配(SINPAI)しても子どもの力にはならない、子どもの育つ力を信頼(SINRAI)してください、と、お母さん方にお願いしています。これはどんな大人にも、もちろん親にも適用されることだと思います。

リーダーとしてAP講座を開くたびに、自分の親としての姿を振り返ることができました。私の子ども2人は既に成人し、助けてもらうことも多くなりました。さてさて、私は良い母親だったかなあ?私が楽しかったのだからそれで良いのか。少なくとも、私の口癖の「完璧な親は子どものご迷惑」には、ならず済んだと思えますが・・・。

全国のAP仲間の皆さん、これからもどうぞよろしく!



「いっしょに暮らしているだけでじゅうぶん教育であって、それ以上を求めたら子どもは歪んでしまう恐れがある。自分にできないことはもちろん、できることも親は子どもに求めてはいけない場合もある。ここに帰ってくれば大丈夫という安心感を与えるだけでいいのだ」
～脚本家 山田太一さんの言葉から～

NPO法人アクティブ・ペアレンティング共育サポート
糸島グループ代表 魚永 久子

「糸島市でもAPを拡げたい！」という願いから、平成24年に福岡のNPOから派生的に『NPO法人アクティブ・ペアレンティング共育サポート 糸島グループ』が出来ました。今年度は、新しいメンバーに加えAPジャパン代表の野中さんもメンバーとして入っていただいたのでグループの中に新しい風が吹き込み、新たな糸島グループとして活動がスタートしています。

過去三年間、糸島市との共催事業をして感じたことは、地元でAPを根付かせるためには“糸島の糸島グループによる糸島のための活動”が必要ではないか、という事です。そこで今年度は『日本一親子関係がいい街を目指して』というテーマを掲げ、糸島市市民提案型まちづくり事業に応募し、糸島市の子育ての現状を把握した上でAPのニーズを探ることにしました。

具体的な活動としては…

☆アンケートによる保護者の意識調査の実施（9月）

市内7校の小・中学校をピックアップし、約2300名分のアンケートを配布しました。その結果、6割程度回収が出来ました。現在集計作業をしているところですが、アンケートには子育ての悩みや、市に対する要望が書き込まれていて、市や学校にとっても価値のある報告書が出来るのではないかと大いに期待をしています。

☆『子育てスタイル診断会』の実施（10/28, 11/7）

チェックリストを使って、自分の子育ての傾向を見ていき、今後の子どもとの関わり方を考えてもらいます。また、この診断会の中で出てきた生の声も、『いい街づくり』の参考にしていきます。

☆『AP講座 3回無料体験』の実施（11月～12月）

APを学ぶことで、子育てにどんな変化が出るのかを実際に体験してもらうために、講座の一部を無料体験してもらいます。平日（午前）と土曜（午後）の2コース計画しています。

*『診断会』には若干の空きがありますので、ご希望の方はご連絡下さい。（090-7292-8663魚永まで）

活動を通して今年度は特に、人と人とのつながりの温かさ・有りがたさを感じています。今まで少しずつ蒔いてきた種から、たくさんの花が咲くことを願って今後も活動を続けていきたいと思えます。

NPO法人アクティブ・ペアレンティング共育サポート
理事長 佐藤 由美

10月8日から「ガミガミ言わずに育てる方法」の5回シリーズのワークショップが始まりました。定員30名に対して申込みが殺到し、キャンセル待ちがでる程とても反響が大きく、スタッフにとってはとても嬉しい悲鳴です。

初回は「優しい親でいたいのに～イライラはどこからやってくるの？～」というテーマでした。まず参加者に日頃イライラする事例を書き出してもらいました。その後、何がイライラの原因になっているのか講師の説明を聞き、平等感覚チェックシートに記入した上で、グループの人たちと分かち合いながら自分を分析していく時間をもちました。

参加者の皆さんに和んで頂けるよう、ワークショップ終了後にコーヒーや紅茶などを用意し、プチティータイムを設けています。ほとんどの方がおしゃべりに興じていかれ、席を立つ腰が重そうでした。ひとりでも多くの方にAPの講座に興味をもって頂けるよう、働きかけにも工夫していきたいと考えています。

東区の妙法寺でのワークショップも月1回行われています。参加者は10名程度ですが、お寺の御堂で行うワークショップは、すごく落ち着いた雰囲気の中で趣があります。そういう雰囲気が、さらに参加者がお互いを支え合う環境を作っている感じがしています。



こんなステキなチラシができました！



ワークショップ当日

～講座のおさらいコーナー～

「きちんと!」「早く!」「まちがいなく!」

この3点セットを手放しませんか?

受講生の皆さんが難しいと感じているのは「責任感の強い子どもに育てる」という4章のようです。この章では、子どもの気になることやどうしたものかと困っていることなどについて解決するさまざまな「方法」を学びます。

4章に示す問題の解決方法としては、親の考えや価値観などを吟味するところから始まり、子どもに優しく丁寧にお願いをする、マイメッセージを使う、成り行きに任せる、条件を出して選択させる、あるいはどちらかを子どもに選択させるやり方まで、方法はいくつもあります。

このような方法を使って、できる限り解決したいものですが、なかなか身につかなくて「APで学習したのにちっともうまくできない!」と、思っているお母さんは多いと思います。とっさの出来事に新しく学んだ対処方法を使うのは、まさに指南の技でしょう。アタマでわかっている、教科書通りにはできないものです。できるようになるまで何回も「練習(トレーニング)」することが必要なのです。あきらめないうで、気軽にチャレンジしていきましょう!

またリーダーであっても、わかっているやれないことはいっぱいあります。迷ったり、悩むこともいっぱい。大事なことは、「いざ!」というときに、APを使って解決できればいいのです。

たまに「APは子どもを叱ったらいけないのですよね」と言われる方がいます。親も人の子、とっさのときには冷静ではいられないでしょう。つい大きな声で叱ることだってあります。叱ってはいけないということではないのです。叱り方が大事なのです。子どもをおどしたり、責めたり、追いつめるような言動は控えた方がいいでしょう。叩くのは、すぐに止めましょう。自分が悲しくなりますから・・・あるお母さんは、感情的に叩くのは良くないと冷静に叩いた後で、子どもが「ごめんなさい」と謝るとマニュアル通りに抱きしめていました。このやり方だと子どもは混乱しますし、親の「本気」さも伝わりません。「しつけ=叱る(怒鳴る・叩く)」と思っている親もまだまだいます。おどしたり、叩いたりしないで

も、勇気づけながらしつけができることを理解すれば、親はとても楽になります。

親子関係の中ではさまざまな問題が生じます。その問題をどのようにして解決していくかを、子どももじっと観察しています。親が力で言いなりにしようとするれば、子どもに力こそ重要なのだと教えることになります。力争いになるような状況になったときは、力争いからいったん引いて、冷静になってから「子どもと話し合うこと」「子どもに選択権を与えること」を試してみましょう。そして日頃から「子どもと楽しい時間をもつ」ことを忘れないようにしましょう。

もし、子どもがして欲しくないことをやったときは「やったことだけ」を注意しましょう。例えば「汚れた服が床に置いたままだよ」「汚れた服は洗濯かごに入れてね」それでも素直に言うことを聞かないときは、お母さんが困っていること、どうすれば問題が解決するのかを子どもと話し合ってみましょう。お母さんが困っているなんて、子どもは気づいていないのかもしれないので、ここで「マイメッセージ」を使って、お母さんの気持ちや感情を伝えるのは効果があるかもしれません。

子どもに何回言っても言うことを聞いてくれないのでイライラする親は多いものです。何回言っても言うことを聞かないのは、お母さんの言葉が心に入っていないのかもしれない。毎日同じことばかり、それも命令口調で言われるのは、大人でもイヤなものです。子どもを責めるのではなく、自分の態度や行動が、子どもの問題を悪化させていることに気づくことも大事ではないでしょうか。子どもが変わることだけを期待するのは、親のエゴというもの。

お母さんの話題に上がる話は、子どもの「しつけ」や問題行動に関するものが主ですが、話を伺っていると、多くは子どもへの期待やハードルが高いところから生じているようにも感じます。特に「早く、きちんと、まちがいなく」の3点を手放せば、もっと楽しく子育てができると思います。



ケンカばかりなんだから・・・(|||▽)/(:)



☆ 講座が始まりましたらすぐ受講生の名簿をお送り下さい。その際には郵便番号とお名前にふりがなをつけてお送り下さい。

☆ 年会費はリーダー資格登録年会費(6,000円) トレーナー登録年会費(10,000円) となっております。この年会費にはリンク購読料も含まれております。お間違いないようにお願いします。登録年会費はできるだけ年内に納入をお願い致します。受講生のリンク購読料は受講年度は無料ですが、次年度からも購読希望の方は年間2,000円になります。

☆ アクティブ・ペアレンティングのロゴ入りのステキなエコバッグ(綿素材) を作りました。A4サイズのノートがすっぽり入ります。講座の時に買い物にも役立ちます！1コ500円です。購入ご希望の方はお申し込み下さい。

☆ APジャパンの住所は今までと同じですが、住所内(事務所)には常駐していません。テキストの注文や受講生名簿の送付などのAPジャパンへのご連絡はできるだけ携帯電話あるいはメールでお願いします。

APジャパン事務所

☎：携帯電話：090-8391-3196

携帯メール toshiko-mama-718@ezweb.ne.jp

あとがき：文科省の発表した調査によると、昨年度中に全国の小学校であった児童の暴力行為は約1万1千件に上ったという。1年生の暴力は8年前の5倍で4年連続で増えているらしい。感情を抑えられない、がまんできない子が多いという。ある児童が乱暴したので先生が「お友達を叩いちゃいけないよ」と注意したら「うちの父ちゃんはもっとすごい！」と答えたそう。家で、繰り広げられる光景を見て「こういうときは殴っていいんだ」と学習するのだろう。そう思うと何だか悲しい。ある時期まで親は子どもにとって「絶対的な存在」である。親のすることなすこと、その良いことも悪いことも子どもはいつの間にか取り入れてしまう。まさに「子どもは親の鏡」である。APを受講する多くの親は教育熱心で、真剣に子どもの将来を考えている親が多い。真剣で熱心なあまり、つい親の理想の「いい子」の枠にはめようとしていることに気づいていないこともある。講座は「自分中心」あるいは「親のための子育て」になってはいないだろうか考えるいいチャンスだ。忙しい毎日だからなおのこと、そのように自分を振り返る時間が大切だと思う。子どもには完璧な見本などいらぬが、人間味があり、より良く生きていきたいと思って模索している親のありのままの姿をみせたいものである。



APP社のホームページ

<http://www.activeparenting.com>

APジャパンのホームページ

<http://www.activeparenting.or.jp>

「リンク」はAPジャパンの印刷物です。

© 2015 発行者 APジャパン

代表 野中 利子

〒814-0111

福岡市城南区茶山2-2-5 (事務所)

電話：090-8391-3196

FAX：092-851-8606

apjapan@activeparenting.or.jp

「リンク」は年間4回の発行で2,000円です。